

## 学校づくりの夢

### 千葉県千葉市立打瀬小学校長 溜 昭代

夏季研修会で打瀬小・中学校にお出で下さってありがとうございました。来校者からこんな言葉を聞いたことがあるのですが、会員の皆さんの感想はいかがでしたか。

- ①「すげーじゃん。おれ、もう一度こんな学校で勉強したいなあ」
- ②「勉強しているのか遊んでいるのか分からないんですが、教育はこれでいいんですか」
- ③「子供達も先生方もみんな楽しそうだけど、校長先生の魔法の杖の正体は何ですか」
- ④「ずるい！同じ千葉市の学校なのに。お金の掛け方が平等じゃない！」
- ⑤「この学校で働きたい」

①、②は建築科の学生、③は某県の教育委員、④は前任校の卒業生が遊びに来て、⑤はニューヨークの先生です。

私がオープンスクールを初めて見たのは、15年前、緒川小学校でした。子供の時からずっとハーモニカのように並んだ《あの教室》しか知らなかった私は、子供の生活の間もある学校環境に驚きました。「いつかは、こんな学校を作って子供達を育ててみたいなあ」と思ったものでした。

はげみ学習をしていたのでしょう、緒川小の子供達は色々な場所で、参観者がありながら、全く気にしないで自分で学習をしていたのにも驚きました。

それぞれの学年のオープンスペースの学習家具、次の学習の意欲化を図るような展示物、子供によるクラブ設立の趣意書と募集ポスター等が印象的でした。報告された実践、特に「生きる」は衝撃的でした。私立ならいざ知らず公立の小学校でもこんな教育ができるのか、感動しました。

夢は見るものですね、オープンスクールの開校に立ち会う機会が12年後にやってきました。学校づくり、あるいは学校改革をしようとするには、ロマン・スタッフ・カリキュラムと佐久間氏が主張していると聞きました。

私の経営方針は「やわらかあたま、あつたかは一とで夢をつかめ」です。学校づくりの要素、ロマンを夢と表現しているのです。個性化教育、それは、「未来に生きる子供の基盤づくり・生きる力」の育成です。そのためにはスタッフに「想像力と創造性」をフルに発揮してもらわなくてはなりません。それは、「やわらかなあたま」が生み出すのです。「やわらかあたまとあつたかは一と」の持ち主が集まってくれたことが打瀬小の早い立ち上がりにつながりました。

また、私が緒川小を参観して啓発されたように、スタッフにも先進校で学んでもらいました。こういうときに全個連のネットワークが有効です。ステップ学習の資料を頂戴するなどたくさんのご教示戴きました。大磯小、緒川小、大正小、萱田小、宮前小、根岸小、谷中小にこの紙面をお借りしてお礼申し上げます。

今までの《あの学校》《あの教室》からふっ切れたスタッフは、子供達の主体性を何より大事にし、・オープンスペースの活用・T.T.の導入・複数担任制を当たり前の事として受け止めるようになりました。打瀬学習(総合学習)の開発にも取り組み出しました。その結果、個性を輝かせ、主体的に判断し、行動する子供達が育っていることを実感します。しかし、各学年に成文化されたカリキュラムができていませんでした。特に打瀬学習については、その内容、指導法(学習法)、時間の見通し等をはっきりさせる必要があります。

打瀬小3年目の夏は、カリキュラムを作成しています。打瀬学習そのものの規定が揺れたり、侃々諤々の議論をしたり楽しい(苦しい?)作業です。これができあがって私達の第1次打瀬小づくりはピリオドを打ちます。

(9月中旬よりアドレス未定ですがホームページを開きます。アクセスしてみてください)

# 第13回 全個教連夏季研修会 総合学習のあり方を考える

『始めの一步』の踏み出し方は、  
どうあればよいのか

[期日]平成9年8月1日(金)・2日(土)

[会場]東京 上智大学6号館 千葉 千葉市立打瀬小学校

8月1日(金) [第1日目]

## 講演①

### 「総合学習と問題解決」

東京学芸大学助教授 浅沼 茂

はじめに、日本カリキュラム学会で、総合学習の類型について検討されたことが紹介された。(加藤先生によれば、教科の延長と考える研究者ばかりで孤独感を味わったといいます。)

続いて浅沼先生は、実践されている総合学習には「根本的なもの、哲学があまりはっきりしていないものがある」という問題を取り上げ、国際化・情報化など新しい課題の対応だけでなく、「学習そのものを変えていくのに総合学習が必要である」が、「体験させれば問題解決学習や総合学習になる」という風潮があることを指摘された。

## 総合学習のあり方を考える



その上で、今後の実践は、「総合学習の質」について、もっと考えていくべきとした。具体的には、体験の中で自ら問題をつかみ、解決していくという問題解決のプロセスを重視することや、問題解決の中で、個と個がぶつかりあう場面の大切さについて、実践を例に話された。

その際、教師は、教師主導や誘導で学習を進めるのではなく、待ちの姿勢で、「見えない手」を差し伸べたり「隠れた舵取り」をすることが必要であると力説された。

さらに、問題解決では、「ヤギを飼いたい」というような自分の勝手な思いつきや持っている思考・観念を「どんな物を食べるのか」「誰に聞けばよいのか」などと操作化する「演繹的プロセス」が大切であり、これには「創造的想

像力」が必要と説かれた。

最後に、「総合学習の質が悪いと、はい回る経験主義の二の舞になる」ことを改めて指摘され、講演をまとめられた。

(文責 松浦 盛人)

## 講演②

### 「総合学習の考え方・進め方」

国立教育研究所室長 高浦 勝義

中教審第一次答申の「横断的・総合的な学習」のねらいには、方法概念と目的・内容概念がある。これまでは量的改革であったが、今回は教科カリキュラムの反省により、カリキュラム統合(総合学習)が提言された質的改革である。子どもの発達に必ず教育とは、子どもの立場に立った教育であり、カリキュラム統合は子どもの生活経験から作られるものである。子どもが統合しない限り統合学習とはならず、この学習をする中で問題解決を必要とする。

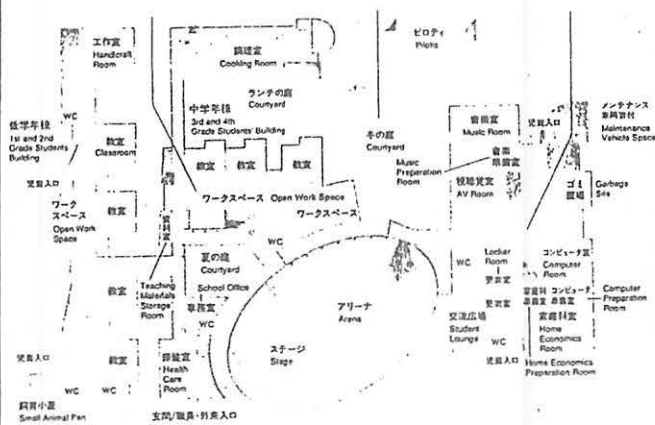
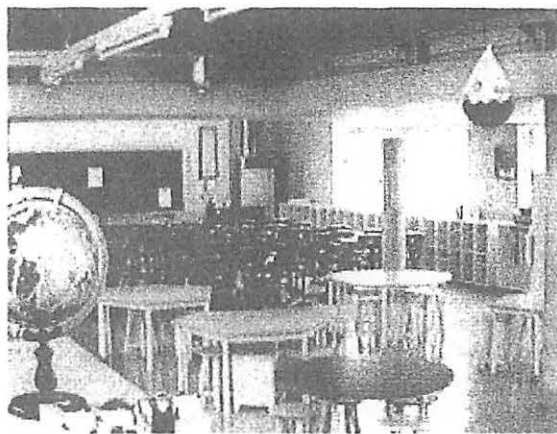
## 全国個性化教育研究連盟



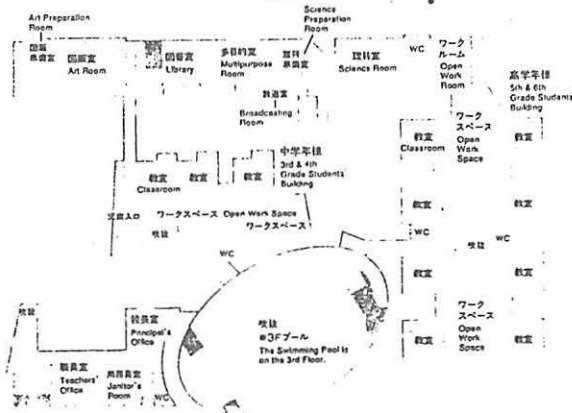
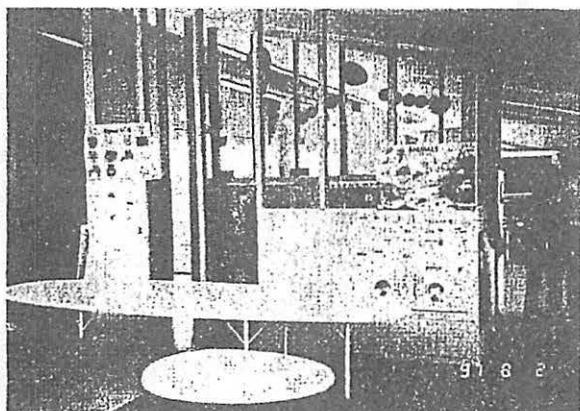
アメリカのミドル・スクールでは、カリキュラム統合の方法として二つの動きがあり、単元全体の流れを具体的に述べ、以下のようにまとめる。一つは、学習の目的が教科・認識の勉強である教科統合型(横断的)カリキュラムである。もう一つは、子どもと一緒にカリキュラムを作っていく生活経験型カリキュラムである。これらの統合カリキュラムの編成原理は、経験の統合、生徒参加、社会的統合、知識の統合、カリキュラム計画としての統合である。

文部省が教課審に提示した「総合的な学習の時間」の案では、総合学習は生活経験型カリキュラムである。授業時間数は、低学年は総合的

8月2日(土) [第2日目] 施設見学  
千葉市立打瀬小学校



..... **1F** ..... **2F** .....



学習として生活科があるので、3年生以上で週2～4時間となっている。また、教科で学習する内容を総合学習で学習した場合、総合学習でカウントしてよいとある。したがって、問題解決の場として教科を考え、教科と総合という二元論にならないように、単元を組み直す必要がある。(文責 加藤 勇)

## 実践報告

①【基調提案】 多田 信夫(埼玉・高砂小)  
《実践報告》 山口 真吾(埼玉・水深小)  
多田先生から、『総合・教科・道徳・特別活動の4領域編成の導入』についての基調提案がなされた。高砂小学校において本年度より5年計画で取り組み始めた「子ども中心の教育課程」の編成の実践を例に挙げ、総合学習の始めの一步についてお話があった。自己教育力を育成するためには、問題解決的な学習を意図的、計画的に実施していく必要がある。そして、その問題が子ども達にとって真の求めや願いとなるように、生活の中で密接に関わり合えるような学習環境を設定しなければならない。そのために、学校、社会、家庭の連携を深めるとともに、従来の教科の内容を子ども中心の教育原理のもとに再構成、すなわち統合していこうと提案された。



山口先生からは、総合学習3年生『みんなとともに』(国語+理科+道徳)の実践が報告された。子どもが思いや願いを持ち、その自己実現に向かった生き方を主体的に考えられるように、各教科の内容を統合し、単元が構成されていた。また、子どもに対する教師の願いと子ども自身の願いが重なるように、学習環境を整備し、体験的な活動を積極的に取り入れていた。その中で、子どもは、これまでの知識を修正し新たな知識を得、態度や行動を積極的に変容させていった。子どもの主体性を生かすとは、子どものやりたいことをただやらせればいいのではなく、子どもを見取り様々な手立てを講じ

子どもに自分自身の思いや願いに気づかせ、その実現を支援していくことだということを教えてくれた実践であった。(藤巻 稔)

②【基調提案】 成田 幸夫(愛知・大府中)  
《実践報告》 寺岡 英郎(香川・坂出中)  
成田先生からは、『なぜ、総合学習に取り組むのか』という題で自身の経験もふまえてお話しいただいた。

その後寺岡先生からは『生涯学習の力を培う「合科型自由学習」』という題でお話をされた。授業の形を「共通学習Ⅰ」「共通学習Ⅱ」「合科型自由学習」の3層構造で構成している。「共通学習」を基礎・基本的な学習、そして「合科型自由学習」を生涯学習につながる主体的な総合学習として位置づけている。

現在、「生涯学習のもとになる力を育む学校教育活動—自己理解と実感を柱として—」というテーマのもとに研究実践を行っている。

カリキュラム構造図は、自己をとりまく外界と関わる中で、自己理解を深めながら自分の文化を創っていく力をつけさせよう。という内容である。自己をとりまく外界や他者と関わり対話を重ねながら「気づき」を生み出し、それを意識している自己を見つけることによって自己を認識する。そして、さらに自己の過去の経験や認識を書き改めていくことによって、深く自己を理解していく。つまり、自己内においてネットワーキングを重ねながら、共通Ⅰ、共通Ⅱ、合科型自由学習と、学習を進めることによって生涯学習につながる拡大・深化した自己を生成していくカリキュラム構造を作っている。ここには、「気づくためのゆとり」や「自己をみつめるゆとり」を確保することが最も重要な支援の要素になる。

平成3年度には2ないし3教科の合科での6つの自由学習を設定。平成9年度には8つの自由学習を設定している。親子セミナーを開いたり、自由学習を紹介する学校だよりも発行されている。(川島 良代)

## 研究協議

【司会】 池田 伊三郎(神奈川・大磯小)  
【助言】 上智大学教授 加藤 幸次  
国立教育研究所 奈須 正裕

各実践発表に続いて研究協議が行われた。坂出中の通知表の項目についてのことや、子どもの意欲化を図るための支援について、総合学習が始まる出発点をどうしたらよいか、総合学習を進めていくとどうしてもコスト面でのことは避けて通れないので、そのことについて、などが質問として出された。



## 総合学習のあり方を考え



それに対して通知表については、生活経験総合型の評価であること、支援としてはポートフォリオの立場で教師や子どもが自己評価を行うことが必要であること、出発点としては、子どもと教師の心が響き合えば、教師の投げかけ(場の設定や材の投げかけ)も有効な手だてであること、などが助言者の先生から話された。

また、総合学習を進める際に、材の吟味として見通しや子どもの願いを知ることが大切であること、計画は子どもの動きに合わせて修正し、子どもの関心が離れたら即時撤退というようなことも話された。

総合学習についての研修会も、回を重ねてきたが、参加者の意識も高くなっていることを肌で感じている。非常に有意義な研究協議であった。(文責 中田 泰志)

## 8月2日(土) [第2日目] パネルディスカッション

### 「総合学習のあり方を考える」

溜 昭代先生 打瀬小校長  
上野 淳先生 都立大教授  
加藤幸次先生 上智大教授  
奈須正裕先生 国立教育研究所

上野先生の、自分が手がけた打瀬小について、どのような考えで建築に携わったかについての話からシンポジウムが始まり、続いて溜先生が開校当初から、ハード面はもちろんのこと、それ以上にソフト面においてどのように打瀬の教育作り出していったかについて話された。その

〈事務局への問い合わせ・連絡先〉

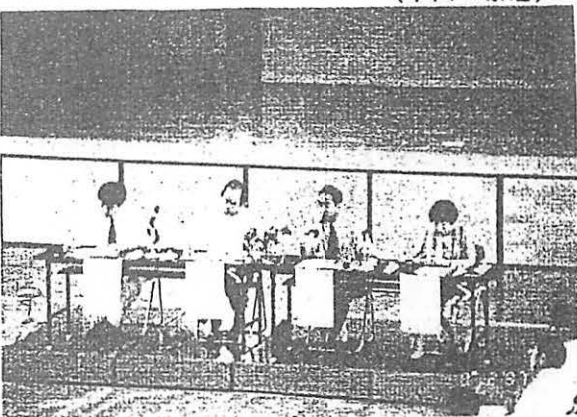
〒114 東京都北区赤羽南 1-16-2-504  
03-3903-4780 庶務部長 佐久間茂和

後加藤先生より、従来の教室の構造が問題解決学習にふさわしくないという話を、奈須先生から、総合学習とはなんなのか、そしてどのような考えに拠って立つべきなのかを話された。

その後、打瀬小での具体的な学習の取り組みや米国のミドルスクールを例にした学校環境の話、教師と子どもと環境の三者の関係などが四人のシンポジストから話題として出された。

フロアからは、総合学習や個性化教育はカリキュラム改革の糸口であるという話や総合学習におけるカリキュラムづくりについての話題が出された。これについてはパネリストから、生活を拡充していこうとする見通しを持つことの重要性、学習材にどんな価値があるか教材研究が必要であること、教員の環境をしつらえる力が大切であることが話にのぼった。

(中田 泰志)



## 書籍発刊のお知らせ

すでに店頭に並んでいるので、ご存じの方も多いかと思いますが、加藤先生が編集にあたり、全個連の会員が執筆した、本が出ました。教育開発研究所から『「いきる力」を育てる新しい授業』という全六巻のシリーズの第一巻です。『「新しいパラダイム」による授業の創造』というタイトルで、個性化・個別化教育の様々な側面について実践例を交えながら、会員が精魂込めて執筆しています。是非ご覧になってみてください。

全国個性化教育研究連盟会報 第43号

平成9年9月13日発行

編集責任者  
編集

事務部長 高浦 勝義  
広報部 グループ埼玉